
無題 no title

ハルコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無題 no title

【Nコード】

N4301D

【作者名】

ハルコ

【あらすじ】

ほのぼのテイストで送る、ボンヤリ少年とキツパリ少女のお話。オムニバス形式。HPの長編のおまけとして書かれました。

無題 n o t i t l e

「運命って、変えられることを言っただって」

「……は？」

「で、変えられないのが、宿命」

「……ふ……ーん」

他にどう言えば良かったのか。とにかく佐久間さくま 侑子ゆうこはそれしか
言えなかった。

放課後の教室。鮮やかな朱色に染まる机、黒板、そして何やら突
然呟き出した少年。

少年・語木かたらぎ 隆祐りゅうすけは侑子の二つ前の、左斜めの席に座って居る。
ちょうど窓際の席で、ぼんやりと空を眺める。

今まで一度も話した事のなかった少年が、なぜ自分に話しかけて
きたのか。侑子には解らない。

確かに今、教室には私しか話し相手が居ないけど！ てかな
ぜウンメーとかシुकメーとか！？

その手の話が大嫌いだった侑子は、握っていたシャープペンシル
の芯を折る。

勢い余って、学級日誌の「今日のひとこと」欄に小さな穴を空け

た。

別に日直のペアでも無い隆祐 侑子の相方は逃走 は誰に話すという訳でもなく呟き続ける。

「テレビで言ってたんだ。でもドラマや漫画では運命って変えようが無いって良く言うよね……」

「……」

返事をして良いものが解らない。どう言えば良いかも解らない。

隆祐はクラスでも目立たないタイプの少年だ。仲間外れにされている訳でも、ましてやイジメられている訳でも無く、いつもボンヤリ一人で過ごしている。

無造作に伸ばされた黒髪はクセが有り、侑子の肩でピツシリと揃えられたモノとは正反対と言える。今はそれが夕日に朱く染まり、緩やかな風で動くまゝで別の生き物に見える。

てかナゼ帰らない語木隆祐！ あんたは帰宅部だろう！

侑子は覚えている。隆祐が春の体力測定の短距離で好成績を叩きだし、後日陸上部にスカウトされたことを。スカウトされた隆祐はすぐに断った。

走る意味を見い出せない。

それが断った理由。以来陸上部の者とは仲が良いと言う訳では無いが、本人は気にしてない。

とにかく少年は部活に所属していないハズなのに、なぜまだ学校に残っているのか解らない。不気味だった。

さっさと書き上げて帰ろう。

侑子は「今日のひとこと」欄をテキトーな言葉で埋めていくが。

「佐久間さんは」

決定打。名前を呼ばれては返事をしなくてはならない。侑子の性格上、無視もできない。

「……なに？」

「佐久間さんは、運命とか宿命とか。どう思う？」

「……はあ」

溜め息混じりに聞き返す。

「俺は、運命って偶然の寄せ集めだと思うんだ。偶然が重ね合って今があるなら、それはどうしようも、避けようの無い流れなんじゃないかなと思う。それなら運命も宿命も、変えられないって意味ではどちらも同じなんじゃないかなあ」

「……」

「ちがう？」

隆祐が初めて侑子を振り返る。窺うような目線を送った。

そして侑子は、限界だった。

「ばっかじゃないの」

「……」

隆祐は何も言わず、表情も変えない。侑子の言葉を待つ。

「運命も宿命もね、何もしない奴が、しなかった奴が使っ言い訳なのよ。自分で、自分の人生を変えようって本気で思ってたら変えられないことなんかないんだから」

「……うん」

隆祐は笑った。嬉しそうに。

侑子はまだまだ言ってやりたいことが有ったが、その笑顔を見ると毒気を抜かれた様に言葉が出て来なくなった。

隆祐はカバンを掴んで立ち上がる。

「佐久間さんなら、そう言ってくれる気がしてたんだ」

ありがとう、と言って隆祐は教室を出て行く。
残された侑子は、開いた口が塞がらない。

「……なにソレ」

独り言が教室に響く。

もしかして、否定して欲しくて、わざわざ教室に残ってたの？
私が日直の日に、皆が帰るのを待って？

なんだかおかしくなってきた、くすりと笑う。

侑子にはボンヤリした性格の友人が一人いる。

なんだかその少女と隆祐が似ているようで憎めなかった。

「……変なヤツ」

しかも困ったことに、今後隆祐との会話が増えるであろうと予感する侑子だった。

無題 2 no title

「あのさ、ウチに来れない？」

「……は？」

あまりに唐突な質問に、侑子は思わず聞き返した。

目の前の少年・隆祐と少しずつ会話をするようになって、だいぶその突拍子の無い会話にも慣れてはいたが、この質問はあまりにも唐突だった。

今、侑子たちは授業の時間を使って、校外のゴミ拾いに出ている。

エンジ色のジャージで、まだ強い日差しから肌を守り、ぶつぶつと文句を言いながら煙草の吸い殻を取っていた時にそう言われた。

侑子と一緒に掃除をしていた友人もパチクリと目を丸めている。

「ちょっとウチに来て欲しいんだ」

「……」

淡々と言う隆祐に、特別な感情がある様には見えない。本当に、ただちよつと、家に来て欲しいのだろう。

「……駄目なら……いいんだ。うん。言ってみただけだから」

侑子が無言のまま固まって居るのを見て、隆祐は頭を掻きながら

離れて行く。

その背中にはなぜか哀愁が漂っているように見えて、

「……家、どこなの？」

気がつけばそう言っていた。

少女の性分から言って、見捨てることはできなかった。

「よかった。ダメもとだったんだけど、言ってみて」

鼻唄でも歌いかねないくらいその声は踊っていて、少年の機嫌の良さが窺える。

普段無表情な彼からすれば、格段に珍しいことだった。

なにがそんなに嬉しいんだろ。

隆祐の後を追いながら、侑子は首を捻る。

電車で二駅。さらに次の駅で降りる侑子は、意外と隆祐の家が近かったのだと知る。

夕日に染まる川の上を歩いていると、隆祐が振り返った。

「きつと驚くなあ」

「……？」

その言葉は自分に言われた様には思えない。ただの独り言の様だ。

「驚くつて。誰が？」

問われた隆祐は目を細め、少し笑ってまた歩き出す。

答えるよ！

心中で怒ってみても、実は腹が立っている訳でもなく、大人しく隆祐の後を追う。

もうこついう遣り取りには慣れっ子だった。

ま、行けば解るでしょ。

行けば解るとは思っていたが、まさかココまで解りやすい驚き方をされるとは侑子も思っていなかった。

侑子の目の前に立っている女性は、恐らく隆祐の母親なのだろう。うつすら見える白髪とは対照的に、顔付きは少女らしく、どこか可愛らしい顔をしていた。

隆祐は母親似か。

母親と、彼女が驚いた拍子に落としたお玉を交互に見ながら、そんな事を考えた。

「ただいま」

隆祐がお玉を拾い、母親に声をかける。

「……あ……らま、まあまあ！」

母親はお玉と隆祐を無視するカタチで、侑子に歩み寄った。玄関に、靴下で。

「隆、隆。この子ね？ 前に言ってた子ね？ ホントに、ホントに……」

「……？」

母親は涙ぐんでいる様に見えた。

「母さん」

「あ、……ごめんなさい。隆祐の母、可南子です」

「……あ。佐久間悠子です。はじめまして」

一拍遅れて返事、頭を下げた。

「侑子ちゃん」

母・可南子は輝かんばかりの笑みで侑子の手を取り、引っ張る。

「何も無い所ですけど、上がって、ね？ ご飯食べて行つてね」

「あ、あの……！」

有無を言わせぬ行動力に困惑しつつも、侑子は居間へと招かれる。

横目に見えた隆祐の顔は、ホッとしたような、楽しそうな、優しい顔をしていた。

「帰りはちゃんと送ってあげるのよ、隆」

「うん」

テーブルいっぱいに並べられた和食を突つきながら隆祐が頷く。

「いえ、一人で帰れますから……。道も覚えてますし」

これ以上この母子のペースに乗ってはいけない。そう思って断ると、可南子は目を細めた。

あ、また。

時折、可南子は侑子を優しい目で眺める。

食事は美味しいかとか、お茶はどうかとか、そんな世話を焼く時は必ずこの表情になる。

まるで家族に対する表情だと、侑子は思う。

「女の子一人で夜道は危ないわ。ね、送らせて？　大丈夫！　この子は襲ったりしないから」

「へ？　……あ、それは解ってますが」

隆祐は無関心に食事を続けている。

「本当に、侑子ちゃんに何かあったらオバさん困るし泣いちゃうわ。だから、ね？」

最後の「ね？」には断り切れない力が込もっていた。

「……じゃあ」

しづしづ頷く。

無題2 no title (後編)

夜道を二人で歩く。

夏も終わりに差し掛かると、夜風は心地よく体をすり抜けていく。

「ありがとね」

隆祐がぼつりと言った。

「？」

「あんなに嬉しそうな母さん、久しぶりだった。佐久間さんのおかげだ」

「……」

しばらくの沈黙。

「ねえ」

隆祐が振り返る。

「私、誰かに似てるの？」

可南子の表情を思い出すと、聞いてはならない事のように感じたが、

「うん」

隆祐は嬉しそうに笑った。

「兄さんに、ね」

「……へ、え……？」

これは、失礼な話と言うものじゃないだろうか。

混乱する頭で考える。

兄？ 私ってそんな男っぽい？ しかもオバさんも一目見て私と、その兄つてのをタブラせたみたいだし……？

「この人」

突然目の前に生徒手帳が広げられた。

中に知らない男が笑っている写真が挟まっている。

「……あんだ、ブラコン？」

思わず聞いてしまう。

隆祐は戸惑い、照れたように笑って、

「……かな？」

頭を掻いた。

「……ああ、そう」

もう何も言う気にならない。

「懂れてたんだ。生き方とか、考え方とか。俺には無いものをいっぱい持ってた」

悠子は先程の写真を思い出す。日に焼けた肌、鍛えた体でにかりと笑う姿と、自分の何が似ているのか解らない。

「……もう、五年会ってない」

隆祐の言葉にぎくりと身を固める。

隆祐があまりにも明るく話すので、勘違いだったかと思っていたのだが、やはり侑子の考えは当たっていた。

隆祐の表情は暗く、淋しそうに笑っている。街灯が乏しい夜の道では、さらに暗く感じた。

「中東で戦争があつたよね。……それから、しばらくしてかな。自分の目で見て来るって、家を飛び出して」

「……」

「それから音信普通。生きてるのか……死んでるのかも分からない」

風が吹く。先ほどと変わらぬ風のはずなのに、今はやけに冷たく

感じる。

「俺も母さんも占いが好きで、そんな俺たちを見て兄さんは良く言っただ」

ばっかじゃねーの、って。

悠子はびくりと反応する。

「自分が歩いてるより前に、道は無いんだって、自分が歩いた場所……過ごした時間が人生で、占いなんか意味無いんだって」

「……それ」

隆祐がにっこり笑う。

「いつか、佐久間さんが俺に言った言葉に似てるでしょ」

「……うん」

そうか。

悠子は納得する。

そういうタイプの人だったんだ。お兄さん。

そりゃ、中東に飛び立つたりするくらいだもんね。

「俺も母さんも、日本人や、他の国の人が人質になる度に、兄さんもどこかで殺されてるんじゃないかって怖くて不安で……兄さんが

父親代わりみたいなモノだったし」

侑子は隆祐が母子家庭だったと悟る。

「たまらなく不安だから、兄さんの前向きな言葉を聞きたくて、でも兄さんは居ないから。だからあの時、思い切って声をかけた。…
…佐久間さんなら言ってくれそうな気がして」

「ばっかじゃないのって？」

「うん。前向きな、何かを……」

「……なんで」

「そう思ったかって？」

侑子は頷く。

隆祐は考えるように遠くを見つめた。

「最初に見た時から、なんだか雰囲気が兄さんと似てるなって思ってたんだ。強い意志を持って、自分を信じてるっていうか……それに」

「それに？」

隆祐が侑子に向く。

「陸上部の奴らに誘われて困ってた時、言ってくれたよね、覚えてない？」

「…………ああ」

走る意味を見い出せないと言った隆祐と、それに怒った陸上部員の遣り取りを、たまたま廊下で耳にした侑子は思わず言ってしまったのだ。

走る意味が分からないって言うんだから、走る必要ないし、誘わなくていいじゃない。それがコイツの意見で、意思で、アンタ達がとやかく言うことじゃ無いでしょ！

「言った。確かに。…………あれがお兄さんに似てた？」

隆祐が頷く。

「五年も経って、兄さんの生存を絶望視してきて、どうしても救われる言葉が欲しかったんだ。佐久間さんなら、兄さんみたいなこと…………また言ってくれるかなって」

「それで、ウンメーとかシュクメーとか。…………私ってそういうの嫌いに見えた？」

「うん」

「…………」

侑子は息を吐く。

「…………じゃあ、これも言ってあげる」

隆祐は視線をはずすことなく、言葉を待つ。

「いい。まだお兄さんの遺体を見た訳でも無いのに、絶望視なんとするのがそもそも間違ってるのよ。家族なんだから、信じて待つてなくてどうするの？」

「うん」

隆祐は嬉しそうに笑う。

「お兄さんは、生きてるから。絶対」

「うん」

「お兄さんが私に似てるんなら、絶対ぜったい、しぶとく生きてるから」

「うん」

薄暗い道の上でも、隆祐の目が濡れているように見えたが、侑子はそれ以上何も言わなかった。

隆祐は駅についても別れることなく、侑子の家が見える所まで送って来ていた。

「何もココまで来なくていいのに……」

侑子はぶつぶつと文句をたれる。

「佐久間さんに何かあったら、俺が母さんに殺されるから」

ぼんやりしながらもハッキリした口調で、隆祐はここまで乗り切った。やはり可南子と母子なんだと侑子はしみじみ思う。

「俺が、兄さんと同じこと言うクラスメイトが居るって言った時、久しぶりに母さんが嬉しそうに笑ったんだ。だから家に来て欲しくて……。無理言つてごめん、今日はホントにありがとう」

珍しく、明るいつよい笑顔で真正面から受けて、侑子は少し顔をそらす。

「……別に。いいけどさ。」ご飯美味しかったし」

「ホントに!」

さらに輝いた隆祐の笑顔が近づく。

「じゃ、また来てくれる?」

「……え」

「絶対、母さん喜ぶから」

「……ああ、うん」

反射的に頷いてしまっていた。

「やった。じゃあ、また！」

隆祐はいい土産話ができたと思ったのだろう、軽い足取りで去って行く。

「……ああー……なんだか、しまった……」

侑子は、隆祐どころかその母親までも、長い付き合いになる気がしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4301d/>

無題 no title

2010年12月4日14時54分発行